



奈良の むかし ばなし 第91話

中将姫と松尾芭蕉

文・山崎しげ子

奈良盆地の西、葛城市。西を望めば、二上山の緑濃い美しい山容が迫ってくる。その山麓で育った僧源信は、二上山に沈む神々しいまでの夕陽を眺め、山の向こうに西方極楽浄土があると説いた。

* * *

伝説の中将姫は、奈良時代、右大臣藤原豊成の娘として生まれたが、実母と死別。豊成の新しい妻は姫の美貌と才能を憎み、家臣に姫の殺害を命じた。

だが、家臣は姫を日張山の青蓮寺に隠す。やがて父の豊成が見つけ、奈良の都に連れ戻すが、姫は當麻寺で出家。蓮糸で一夜にして「當麻曼荼羅」を織ったとされるお話は有名である。また姫は、宝亀六（七七五）年、二九歳という若さで、極楽の阿弥陀如来や菩薩たちに迎えられ極楽往生を遂げたとされる。

今、當麻寺は、広大な寺域に本堂、金堂、講堂、東西の三重塔などが緑豊かな樹々の中に薨を並べている。

* * *

さて、貞享元（一六八四）年、松尾芭蕉は『野ざらし紀行』の旅に

出た。四一歳、わが身の行き倒れ、野ざらしも覚悟の上、俳句の新しい境地を模索する厳しい旅でもあった。

江戸の草庵から伊勢、伊賀、大和、近江などをめぐる旅の途次、芭蕉は當麻寺に詣でた。境内に聳える松の太木。それが中将姫お手植えと伝わる松。芭蕉は「松は千年はたつと思われ、牛も隠せる大きさ」と記す。

僧朝顔 幾死かへる 法の松

寺の僧も、朝顔も、幾たびも枯れては生まれ変わる。なのに、この松は、仏の加護のお陰で枯れることなく、切られることもなく大きくなった。ああ、尊いことだ、と。

* * *

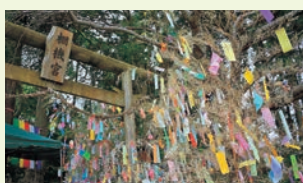
さて、芭蕉を感動させた松もその後、枯れた。今は大きな切り株だけが、屋根瓦も立派な覆屋で保護されている。

芭蕉の「僧朝顔 幾死かへる 法の松」の句碑は塔頭、中之坊の境内にあり、中将姫と芭蕉の昔を今に伝えている。

棚機神社の「七夕祭り」

7月7日。この日、岩橋山麓の高台から大和三山を見渡す「棚機神社」で、「七夕祭り」が行われます。5世紀頃、この辺りには大陸から渡って来た人々により、当時最新の織り機「棚機」と共に、絹などの高級織物を織る技術、また、技術の向上を願う儀式が伝えられたといわれています。現在、境内には地元で「タナバタさん」と呼ばれている小さな祠と、彗星と織姫に見立てられた2本の杉が立ち、棚機神社保存会の皆さんによって大切に整備されています。

七夕の日には、市内の児童や幼稚園児、地元の人々が願い事を書いた短冊を笹につるして奉納。色とりどりの笹が境内を美しく彩ります。神事は16時から。神社には駐車場があります。暑い時期なので熱中症対策を。帰りには、道の駅で名物のソフトクリームやかき氷を味わってはいかがでしょうか。



短冊が境内を彩る七夕祭り

物語の場所、葛城市を訪れよう

當麻寺（葛城市當麻1263）
近鉄當麻寺駅下車 西へ約1km
棚機神社（葛城市太田小字七タ）
葛城市コミュニティバス道の駅かつらぎ下車 北西へ約1km



葛城市商工観光プロモーション課
☎ 0745-44-5111